

当局的尖兵＝労働本部「革マル」の追放・掃を

日刊 労働千葉

84. 4. 23
No. 1624

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五〇六（公衆）〇四七二二二七二〇七

労働本部「革マル」の内達動乗動裏切り妥結を弾劾する

労働千葉は「日刊労働千葉」第一六二二号、第一六二二二号において、動労「本部」革マルが当局と結託し、動乗勤三月末妥結を強行した事実について明らかにするとともに、この裏切りが昨年六月の「動労全国戦長会議」で決定された方針に基づいて行われた犯罪的行為であることを暴露・弾劾してきました。

シリーズの最後に、動労「本部」革マルが自らの裏切り路線を居なおり、動労千葉や国労への組織破壊の攻撃を強めていることについて注意を喚起すると同時に、全国の国鉄労働者が当局の先兵・動労「本部」革マル追放・一掃の闘いに決起することを訴えるものです。

「修正」は裏切妥結のための口実づくり 闘いの圧殺が本当の目的

当局と結託し、動乗勤三月末妥結を強行した動労「本部」革マルは、今日各級機関の集約の場で
① 現行協定と比較してどうこういうのは誤り、
② 提案からどれだけ修正できたかが重要、③ 私鉄並みの攻撃の中で予備と旅費を残したことは成果、と主張し、組合員をごまかし怒りのホコ先をかかわそうとしています。これこそペテンであり、団体交渉大詰め段階で労働組合に妥結を哀願した当局の主張と全く同一のものです。

重要なことは、「修正提案をひき出した」のではなく、現行より大巾に後退した内容で妥結を強行したということです。

事実経過がはっきり証明している事は、①彼らが「闘って」「修正提案をひき出した」などは全くのウソで、②国鉄当局と「6割の動労」が最初から結託して、全職場からの反撃を未然に封殺するために、③全く闘わずして、「たったの10日間」の大意で、しかも劣悪極まりない内容で鉄労と共に片仕切りし、全国鉄労働者に押しつけてきた、という歴然たる事実であり、「修正提案」は裏切り妥結のための「口実づくり」であったという事実です。

当局との結託を自己暴露

動労「本部」革マルは、四月十一日付「動力車新聞」の「主張」欄で、「『国労が交渉しなかった』ことが、当局をして労組法十五条の発動を誘発させた」などと、「国労が抵抗したから三月末で妥結せざるをえなくなった」かのようになっています。

「組合員の利益を守る取り組みの正しさ」、動労がかちとった成果を誇るなら、こんな弁解をする必要はないではありませんか。しかし、そんな疑問も「国労本部は、自らの交渉経過にない具体的内容が集約内容としてできたことに驚いていることを吐露すべきであろう」（同「主張」）

なる文章で、たちまち解消してしまいます。すなわち、「動労主導による決着」なる内実が、当局と綿密に打ち合わせ、結託した代物であることを、正直に恥ずかしげもなく認めてしまっているからです。

「過員」づくりの尖兵＝労働者の敵 動労「本部」革マルの破産は必至

動労「本部」革マルは、動乗勤改悪を受け入れたことについて、「『動力車乗務員の労働条件』という直接性のみで対応しては判断を誤ってしまふ」とか「『国鉄監理委員会』にしめされている国鉄『分割・民営化』攻撃の只中にある」（同「主張」）からだ、と弁明にやっきになっています。このことの本質は、臨調、国鉄当局の「国鉄分割・民営化」を基軸とする国鉄労働運動解体攻撃に屈服し、国鉄労働者を売り渡す当局の先兵となつて生き残る道を選んだということなのです。

それは、ブルトレ手当返上をはじめとする八二年の数々の裏切り、八三年の入浴闘争への敵対、昇給協定改悪の率先妥結、そして59・2大合理化の率先受け入れ等の裏切りをみれば明らかのように、「どんなに合理化を受け入れても乗務員職場さえ確保できればやがて動労が主導権を握れる」との「戦略」に基づくものです。

しかし、こうした「戦略」を許しておけるほど日帝・中曽根に余裕がないことはもちろん、何よりも国鉄労働者の怒りのまえにみじめな破産を上げることは明白です。

なぜならば、動労「本部」革マルの「職場と仕事と生活を守る」と称する「働こう運動」が「過員」を生み、国鉄労働者の職場と仕事と生活を奪う裏切り路線であることが、日に日に具体的事実として明らかになっているからです。

以上見てきたように、動乗勤改悪阻止闘争は当局の先兵・動労「本部」革マルを追放・一掃しない限り、国鉄労働運動の未来のないことを実証しました。全国鉄労働者の力で追放・一掃を実現しようではありませんか。